



## <研究論文>国際的なスポーツ・イベントにおける経験と「共生社会」意識に関する考察：南アフリカ共和国西ケープ州の高等学校に通う学習者に焦点をあてて

著者	坂口 真康
雑誌名	共生教育学研究
巻	6
ページ	47-60
発行年	2019-03-22
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00155035">http://hdl.handle.net/2241/00155035</a>

## 国際的なスポーツ・イベントにおける経験と「共生社会」意識に関する考察

### —南アフリカ共和国西ケープ州の高等学校に通う学習者に焦点をあてて—

坂口 真 康\*

#### 1. 本稿の目的と問題の所在

本稿の目的は、南アフリカ共和国（以下、南ア）西ケープ州の高等学校に通う学習者に焦点をあてて、国際的なスポーツ・イベントにおける経験と「共生社会」意識について考察することである<sup>1)</sup>。なお、後述するとおり、本稿においては、「共生社会」意識の内、特に「ネーション」カテゴリに関わる認識に焦点をあてる。

日本社会は、2019年のラグビーのワールド・カップおよび2020年の東京オリンピック・パラリンピックと国際的なスポーツ・イベントの主催を控えている。文部科学省の「スポーツ基本計画」においては、「持続可能な開発と平和などスポーツが社会の課題解決に貢献することは、国際連合やユネスコなどでも謳われており、スポーツの価値を高める投資が社会の健全な発展に有効であるとの考え方は国際的な潮流である」（文部科学省、2017、p.4）という指摘に加え、「子供、高齢者、障害者、女性、外国人などを含め全ての人々が分け隔てなくスポーツに親しむことで、心のバリアフリーや共生社会が実現する」、「スポーツは、人種、言語、宗教等の区別なく参画できるものであり、国境を越え人々の絆を育む」や「スポーツを通じた国際交流により「多様性を尊重する世界」の実現に貢献する」（文部科学省、2017、pp.4-5、傍点と太字は原文による）などと述べられており、スポーツ<sup>2)</sup>に対して大いなる期待が寄せられている。そして、本計画では、2017年から5年の

間に開催される東京オリンピック・パラリンピックなどの国際的なスポーツ・イベントは「スポーツの力が最大限発揮される絶好の機会である」（文部科学省、2017、p.6、傍点と太字は原文による）と言及されているように、国際的なスポーツ・イベントを通じて「共生社会」や「国際交流」などを促進することに対する期待が寄せられていることが指摘できる。

そのような中、例えば佐久間勲・日吉昭彦は、国際的なスポーツ・イベントと「ネーション」との関連を取り上げた先行研究の整理を通じて、それらが「国際的なスポーツイベントの開催の前後で国民イメージが変化することを繰り返し見出している」と同時に、「その大半は肯定的な方向への変化である一方、少数ながら否定的な方向への変化も確認されている」ことを指摘している（佐久間・日吉、2012、pp.1-2）。加えて、佐久間・日吉（2012）は、自らの実施した調査結果をもとに、国際的なスポーツ・イベントが、特定の「ネーション」に対する肯定的なイメージを促進しようとすると同時に、否定的なイメージも助長しうることを指摘している。すなわち、国際的なスポーツ・イベントには、「ネーション」に関わる認識という観点から——手放しで期待を込めるのみでは十分ではなく——留意しなければならない点が存在するのである。

そして、特定の「ネーション」のイメージに関することと同時に、スポーツに関わる否定的な側面としてかねてより指摘されてきたのが、それと「ナショナリズム (nationalism)」との関連である。例えば、中村敏雄は、日本を含む

\* 兵庫教育大学

多くの国々で、スポーツが、「ナショナリズムの高揚のなかで、あるいはナショナリズムの高揚のために、その手段となり、また重要な役割を担ったことは、いまさら多言を必要としないことである」(中村, 1978, p.1) と述べている。また、清水輸は、国際的なスポーツ・イベントと「ナショナリズム」との関連について次のように述べている。

オリンピックやワールドカップ・サッカー、さらに各種の国際競技大会は、国家を単位としたランキングを明確に測定し表示するシステムとなっています。したがって、他者(他国)よりも秀でた結果を得たいために、集団としての「我々」が想像され、自国へのアイデンティフィケーションを強固なものにします。「スポーツによるナショナリズム」の様相を詳しくみていくことが重要なのです。(清水, 2012, p.40)

ここではすなわち、国際的なスポーツ・イベントが「ナショナリズム」を強化する側面があるため、そのような点を詳細に検討することが重要となることが指摘されているのである。

現在までに、スポーツあるいは国際的なスポーツ・イベントの「ネイション」に関わる認識という観点からの肯定的な側面と否定的な側面が指摘されてきたわけであるが、国際的なスポーツ・イベントの経験と「ネイション」に関わる認識との関連については、既存の議論の中心とはされてこなかった文脈における実証的アプローチをもとにした検討の余地があると思われる。そこで本稿では、日本とは異なる背景を有する社会であり、「共生社会」の実現という観点から、スポーツに対して大いに期待が寄せられてきた社会のひとつである南アに着目する。

ところで、「ナショナリズム」とあわせて言及されることの多い概念に「パトリオティズム(patriotism)」(「愛国主義」や「愛国心」とも訳される)があるが、両者は異なる(濱嶋・竹内・石川編, 1977 [2005], p.1) とされる一方で、「同一視されることもある」(田村, 1986,

p.693) とされる。本稿では、清水の「ナショナリズム」は「単に国民や国歌への愛着を表わす」「パトリオティズム」とは違い、「国民に対して道徳や行為の判断基準を示し、ある方向に国民を仕向けていく政治的プロジェクト」(清水, 2012, p.40) であることから両者は異なるという指摘を踏まえつつも、次の点で両者には共通点があることに着目する。すなわち、「ナショナリズム」は「非常に民主主義的・連帯的なものにもなれば、他方ではきわめて排外主義的・侵略主義的なものにもなる」(濱嶋・竹内・石川編, 1977 [2005], p.475) という指摘や、「パトリオティズム」は「時と場合によっては、エスノセントリズムや排外主義と結びつくおそれがある」(濱嶋・竹内・石川編, 1977 [2005], p.1) という指摘である。これらの指摘を踏まえると、「ナショナリズム」と「パトリオティズム」の意味内容は異なれど、状況によっては「排外主義」と結びつきうるという点において共通点を有しているということが出来る。以上を踏まえて、本稿にて南アの高等学校に通う学習者の社会意識を探索する際には、「ナショナリズム」であっても、「パトリオティズム」であっても、それらには排他的な要素が含まれうるという共通点を前提とした中で分析を展開することとする。

## 2. 南ア社会とスポーツ

1994年に制度としてのアパルトヘイト(人種隔離政策)が撤廃された後の南アでは、初代新生南ア大統領のネルソン・マンデラが、スポーツが人々の「団結と和解のための大きな力」(cited in Hatang & Venter eds., 2011, p.255; 坂口, 2013, p.23) となると述べた言葉に象徴されるように、「共生社会」実現のためにスポーツに対して大きな期待が寄せられてきた。1995年には、南アでラグビーのワールド・カップが開催されたが、阿部利洋によると、アパルトヘイトの支持集団のスポーツとされていたラグビーのイベントにおいて、マンデラが「応援する姿が強調」され、「人種による分断は過去のものだ、われわれはいまや対立を克服しつつある、という印象が共有され、新生国家におけ

るネイション・ビルディングの一環として社会的な和解が演出された」とされる(阿部, 2007, p.285)。このことは、南アにおいては、国際的なスポーツ・イベントが、異なる「人種」集団間の「共生」を促進するものであると同時に、「国民形成」を促進するものであるという位置づけがなされてきたことを示しているといえる。

また、そのような「共生社会」や「国民形成」という観点から、南アの学校教育においても、スポーツの役割に期待が寄せられた中で教育が営まれてきた様子が指摘できる。例えば、南アの高等学校については、2000年代に必修教科として導入されて以降、南アにおいて「共生教育」の一翼を担ってきた(坂口, 2015)「Life Orientation」という名の教科における取り組みが挙げられる。本教科においては、スポーツがその設立当初から中心的な内容として設定され、スポーツが「バイアスの軽減と国民形成に果たしうる役割」(DoE, 2003, p.12)などに焦点をあてた学習内容が組み込まれてきた。すなわち、南アの高等学校に通う学習者は、Life Orientation という必修教科の「共生教育」を通じて、スポーツが「共生」や「国民形成」を促進する側面について学んでいるのである。

そのような中、南アでは2010年に、国際サッカー連盟(Fédération Internationale de Football Association: FIFA)の国際的なスポーツ・イベントであるサッカーのワールド・カップ(以下、FIFA W杯)が開催された。南アにおける2010年のFIFA W杯について、ジェイコブ・ズマ(当時の南ア大統領)は、1995年のラグビーのワールド・カップが「国民をひとつにした」ように、2010年のFIFA W杯も「団結とパトリオティズムの精神を受け取らなければならない」と述べるとともに、「我々は、共に2010年という年を、我々の国民的結束と国民形成に対するコミットメントを更新するための年としなければならない」(Zuma, 2009)と述べ、2010年のFIFA W杯の重要性を南アの人々に訴えていた。さらに、大会組織委員長のダニー・ジョーダンが、大会終了後に、2010年のFIFA W杯が「国民形成」と「社会的結束」

をもたらしたと述べた(Smith, 2010)とされることにも象徴されるように、南アにおいて2010年のFIFA W杯は、先述した1995年のラグビーのワールド・カップと同様に、「国民形成」という観点から、単なるサッカーの国際的なスポーツ・イベント以上の意味を持っていたことが指摘できる。

ここまでに概観したことからは、2010年のFIFA W杯期間中の南アにおいては、あらゆる場面で「パトリオティズム」が鼓舞され、「国民形成」の促進のための取り組みがなされてきたことがうかがえるが、そのようなイベントの重要性は、当時南アの学校に通っていた学習者にも伝えられていたことが推察できる。2010年のFIFA W杯開催中には、南アの学校の登校期間が大会の日程を踏まえて設定される(Gauteng Provincial Government, 2009)など、FIFA W杯に関心がなくとも、高等学校に通っていた学習者は、否応なしにFIFA W杯という国際的なスポーツ・イベントを意識せざるを得ない状況にあったといえるのである。

以上のことを踏まえ、本稿では、2010年のFIFA W杯を何かしらの形で経験したと思われる南アの高等学校に通う学習者に焦点をあて、国際的なスポーツ・イベントにおける経験、ならびにそれらと「共生社会」意識(特に「ネイション」に関わる認識)との関連について、実証的なアプローチによる探索をもとに得られた知見を踏まえて考察する。

### 3. 分析の概要

本稿では、2010年と2011年(いずれの年も7月から8月にかけて実施)に南ア西ケープ州<sup>3)</sup>の公立高等学校3校にて学習者を対象に英語で実施した質問紙調査の一部をもとにした分析を行う。なお、分析に際してはIBM SPSS Statistics Ver.25を用いる。

質問紙調査では、学習者の学習経験、南ア社会に対する認識、異なる「ネイション」に属する人々の受容度や2010年のFIFA W杯における経験などを明らかにするための質問項目を設定した。本稿ではそれらの質問項目の内、特に、

FIFA W 杯における経験と「ネイション」に関わる認識に関する質問項目を中心に取り上げる。その背後には、上述したように、先行研究において「ナショナルリズム」の高揚との関連が指摘されてきた国際的なスポーツ・イベントにおける経験と「ネイション」に関わる認識との関連を探索するというねらいがある。

なお、2010年に実施した質問紙調査（以下、2010年調査）の有効回答数は1,276票（有効回答率99.5%）であり、2011年に実施した質問紙調査（以下、2011年調査）の有効回答数は1,315票（有効回答率99.4%）であった。ただし、本稿では、2010年調査と2011年調査とを比較分析することを分析の軸のひとつに据えているため、2010年調査については10年生（481名）と11年生（396名）、2011年調査については11年生（489名）と12年生（360名）の学習者のみを分析の対象とする。しかし、2010年調査と2011年調査については、回答者個人を追跡しているわけではないため、2つの調査は厳密な意味での追跡調査ではないことから、単純な比較はできない点に留意する必要がある。とはいっても、集団全体の大まかな傾向の変化を探ることではできると考えられるため、本稿では、上記の点に留意しつつも、2つの調査の比較分析を通じて、経年変化の大まかな傾向の探索を試みる。

#### 4. 分析の結果

##### 4. 1. 回答者の特徴の概要

本稿が焦点をあてる2010年調査時に10年生と11年生であった回答者の「性別」の内訳は、女性が54.6%（479名）、男性が43.3%（380名）、無効回答が2.1%（18名）であり、女性が男性よりも多かった。また、「あなたの好みについて教えてください」の問いの内、「スポーツをする」のが「好き」と「どちらかといえば好き」と答えた者の割合はそれぞれ51.2%（449名）と29.4%（258名）、「どちらかといえば好きではない」と「好きではない」と答えた者の割合はそれぞれ12.1%（106名）と6.5%（57名）であり（無効回答は0.8%、7名）、「スポーツをす

る」ことが好きな割合の方がそうではない割合よりも高かった。一方で、2011年調査時に11年生と12年生であった回答者の「性別」の内訳は、女性が53.0%（450名）、男性が41.8%（355名）、無効回答が5.2%（44名）であり、女性が男性よりも多かった。また、「あなたの好みについて教えてください」の問いの内、「スポーツをする」のが「好き」と「どちらかといえば好き」と答えた者の割合はそれぞれ48.3%（410名）と27.1%（230名）、「どちらかといえば好きではない」と「好きではない」と答えた者の割合はそれぞれ15.3%（130名）と8.8%（75名）であり（無効回答は0.5%、4名）、2010年調査と同様に、「スポーツをする」ことが好きな割合の方がそうではない割合よりも高かった<sup>4)</sup>。なお、2010年調査と2011年調査のスポーツの嗜好性に関して、平均値の差の検定を行ったところ、効果量（*d*）という観点から統計的に有意な差はほとんど見られなかった<sup>5)</sup>。

これらのことから、2010年調査時に10年生と11年生であった回答者と2011年調査時に11年生と12年生であった回答者の「性別」とスポーツの嗜好性にはほとんど差がないことが指摘できる。また、本稿が取り上げる調査の対象者の大半が、「スポーツをする」ことに対して好意的であるという前提があることを指摘することができる。

それでは、2010年のFIFA W杯に関する経験や認識ならびに「ネイション」に関わる認識において、2010年調査と2011年調査では、どのような特徴（の異同）が見られるのであろうか。

##### 4. 2. FIFA W杯に関する経験や認識

はじめに、FIFA W杯に関する経験や認識について整理する。ここでは、「2010年のFIFAワールド・カップの主催を経験したことを踏まえて、次の項目に対してどう思うかを教えてください」に付随する質問項目群を取り上げる。具体的には、「南アフリカがFIFAワールド・カップを主催して良かった」、「南アフリカは、もう一度、FIFAワールド・カップを開催すべき

表1 2010年調査のFIFA W杯に関する経験と認識（2項検定）

		肯定群	否定群	有意確率
南アフリカがFIFAワールド・カップを主催して良かった	(N= 873)	96.7%	3.3%	0.000
南アフリカは、もう一度、FIFAワールド・カップを主催すべきだ	(N= 872)	89.7%	10.3%	0.000
南アフリカのチームを応援した	(N= 869)	79.2%	20.8%	0.000
南アフリカのチームよりも他のチームを応援した	(N= 871)	57.4%	42.6%	0.000
異なる人種の人々と仲良くなれた	(N= 869)	78.7%	21.3%	0.000
異なる国籍の人々と仲良くなれた	(N= 870)	72.6%	27.4%	0.000
FIFAワールド・カップは、南アフリカの人々を団結させた	(N= 873)	91.9%	8.1%	0.000
諸外国が南アフリカを認めた	(N= 871)	94.8%	5.2%	0.000
南アフリカが経済的により豊かになった	(N= 872)	70.6%	29.4%	0.000

だ」、「南アフリカのチームを応援した」、「南アフリカのチームよりも他のチームを応援した」、「異なる人種の人々と仲良くなれた」、「異なる国籍の人々と仲良くなれた」、「FIFAワールド・カップは、南アフリカの人々を団結させた」、「諸外国が南アフリカを認めた」ならびに「南アフリカが経済的により豊かになった」という項目群について、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」ならびに「そう思わない」の4件法で尋ねた問いを取り上げる。なお、本稿では、本質問項目群への回答を「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を「肯定群」、「どちらかといえばそう思わない」と「そう思わない」を「否定群」に分けた上で、2項検定を行う（無効回答は分析から除外）。

分析の結果、表1に示したとおり、「南アフリカがFIFAワールド・カップを主催して良かった」、「南アフリカは、もう一度、FIFAワールド・カップを主催すべきだ」、「南アフリカのチームを応援した」、「南アフリカのチームよりも他のチームを応援した」、「異なる人種の人々と仲良くなれた」、「異なる国籍の人々と仲良くなれた」、「FIFAワールド・カップは、南アフリカの人々を団結させた」、「諸外国が南アフリカを認めた」ならびに「南アフリカが経済的により豊かになった」の全ての項目について、「肯定群」の割合の方が「否定群」の割合よりも、統計的に有意に高いという結果が得られた。本結果の内、特に、「ネイション」の越境や自身とは異なる「ネイション」との交流という観点から、「南アフリカのチームよりも他のチームを応援した」および「異なる国籍の人々と仲良くなれた」という経験に関して「肯定群」の割合が「否定群」の割合よりも統計的に有意に高かったという点は、国際的なスポーツ・イベントの「ネイション」に関わる経験に関する肯定的な側面であるといえることから、特筆することができるといえる。

た」という経験に関して「肯定群」の割合が「否定群」の割合よりも統計的に有意に高かったという点は、国際的なスポーツ・イベントの「ネイション」に関わる経験に関する肯定的な側面であるといえることから、特筆することができるといえる。

#### 4. 3. FIFA W杯に関する認識の比較分析

それでは、FIFA W杯に対する認識は、2010年調査から1年の時を経て実施した2011年調査においては、どのように立ち現れているのであろうか。次に、本点を探るために、2010年調査と2011年調査との比較分析を行う。なお、本稿では、上記のFIFA W杯に関する質問項目の内、社会認識に関する項目に焦点をあて、FIFA W杯時点での個人の経験（の記憶）については、取り上げない。

具体的には、ここでは以下、FIFA W杯自体についての認識を尋ねた問いである、「南アフリカがFIFAワールド・カップを主催して良かった」と「南アフリカは、もう一度、FIFAワールド・カップを主催すべきだ」、ならびにFIFA W杯がもたらした効果についての認識を尋ねた問いである、「FIFAワールド・カップは、南アフリカの人々を団結させた」、「諸外国が南アフリカを認めた」および「南アフリカが経済的により豊かになった」への回答と調査年（2010年調査と2011年調査）との関連の分析を行う。なお、分析においては、それらの質問項目への回答を「そう思う」を4、「どちらかといえばそう思う」を3、「どちらかといえばそう思わない」を2、「そう思わない」を1とした上で、調査年間の平均値の差の検定（t検定）を行う（無効

表2 2010年調査と2011年調査のFIFA W杯を通じた出来事に対する認識の比較分析（t検定）

		平均値	標準偏差	t値	効果量( <i>d</i> )	有意確率
南アフリカがFIFAワールド・カップを主催して良かった	2010年調査 (N= 873)	3.85	0.520	1.690	0.08	0.091
	2011年調査 (N= 835)	3.80	0.585			
南アフリカは、もう一度、FIFAワールド・カップを主催すべきだ	2010年調査 (N= 872)	3.64	0.796	2.771	0.13	0.006 **
	2011年調査 (N= 834)	3.53	0.939			
FIFAワールド・カップは、南アフリカの人々を団結させた	2010年調査 (N= 873)	3.62	0.732	5.925	0.29	0.000 **
	2011年調査 (N= 831)	3.38	0.920			
諸外国が南アフリカを認めた	2010年調査 (N= 871)	3.64	0.632	4.269	0.21	0.000 **
	2011年調査 (N= 833)	3.50	0.687			
南アフリカが経済的により豊かになった	2010年調査 (N= 872)	2.95	0.993	4.609	0.22	0.000 **
	2011年調査 (N= 834)	2.72	1.055			

注) FIFA W杯を通じた出来事に対する認識：「そう思う」=4、「どちらかといえばそう思う」=3、「どちらかといえばそう思わない」=2、「そう思わない」=1

\*\* 1%水準で有意

回答は分析から除外)。

分析の結果、表2に示したとおり、「南アフリカがFIFAワールド・カップを主催して良かった」ならびに「南アフリカは、もう一度、FIFAワールド・カップを主催すべきだ」に関しては、効果量(*d*)の観点から統計的に有意な差はほとんど見られなかった。一方で、「FIFAワールド・カップは、南アフリカの人々を団結させた」、「諸外国が南アフリカを認めた」および「南アフリカが経済的により豊かになった」に関しては、効果量(*d*)の観点から統計的に有意な差が見られた。具体的には、それらの項目に関して、2011年調査の方が2010年調査よりも平均値が統計的に有意に低いという結果が得られた。

表2に示した分析結果からは、2010年のFIFA W杯の開催から1年の時を経た際に、FIFA W杯開催自体への認識にはほとんど変化が見られない傾向にある可能性が高い一方で、FIFA W杯開催による南アの人々の「一体感」、外国からのまなざしやW杯開催による経済的な恩恵に対する肯定的な認識は弱まる傾向にある可能性が高いことが指摘できる。

#### 4.4. FIFA W杯を通じた経験と「ネーション」の越境志向との関連

次に、FIFA W杯を通じた経験と「ネーション」に関わる認識との関連について分析する。ここでは、FIFA W杯を通じた経験については、「ネーション」の越境経験や異なる「ネーション」との交流経験に関わる質問項目である、「南アフリカのチームよりも他のチームを応援し

た」および「異なる国籍の人々と仲良くなれた」という質問項目群を取り上げる。また、「ネーション」に関わる認識については、「現在の南アフリカ社会について、あなたはどのように思いますか」（南ア社会に対する認識）ならびに「南アフリカにおける次のような状況について、あなたはどのように思うかについて教えてください」（南ア社会における出来事に対する賛意）に付随する質問項目群の内、南アや外国（人）に関わる問いを取り上げる。具体的には、前者については、「外国から見習うべきことが多い」、「南アフリカ人は、他国の人々よりも才能がある」、「南アフリカに生まれてよかった」、「南アフリカの国歌や国旗が好きだ」、「南アフリカは一流国だ」および「外国人は南アフリカ社会に溶け込める」という項目を、後者については、「たくさんの外国人が南アフリカで働く」、「南アフリカ人が伝統的な文化や習慣を大切にする」ならびに「南アフリカ人が外国の文化や習慣を取り入れる」という項目を取り上げる<sup>6)</sup>。なお、前者は、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」ならびに「そう思わない」の4件法で尋ねた問いである一方で、後者は、「賛成」、「どちらかといえば賛成」、「どちらかといえば反対」および「反対」の4件法で尋ねた問いであり、回答形式が異なる。

分析に先立ち、まずは2010年調査の「ネーション」に関する質問への回答傾向について整理する。なおここでは、上記の質問項目群への回答を、南ア社会に対する認識については、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を「肯

表3 2010年調査の南ア社会に対する認識（2項検定）

		肯定群	否定群	有意確率
外国から見習うべきことが多い	(N= 867)	84.5%	15.5%	0.000
南アフリカ人は、他国の人々よりも才能がある	(N= 866)	45.0%	55.0%	0.004
南アフリカに生まれてよかった	(N= 865)	92.6%	7.4%	0.000
南アフリカの国歌や国旗が好きだ	(N= 868)	87.9%	12.1%	0.000
南アフリカは一流国だ	(N= 870)	43.2%	56.8%	0.000
外国人は南アフリカ社会に溶け込める	(N= 872)	84.4%	15.6%	0.000

表4 2010年調査の南ア社会における出来事に対する賛意（2項検定）

		肯定群	否定群	有意確率
たくさんの外国人が南アフリカで働く	(N= 867)	90.3%	9.7%	0.000
南アフリカ人が伝統的な文化や習慣を大切にする	(N= 876)	92.6%	7.4%	0.000
南アフリカ人が外国の文化や習慣を取り入れる	(N= 869)	81.8%	18.2%	0.000

定群」、「どちらかといえばそう思わない」と「そう思わない」を「否定群」とし、南ア社会における出来事に対する賛意については、「賛成」と「どちらかといえば賛成」を「肯定群」、「どちらかといえば反対」と「反対」を「否定群」に分けた上で、2項検定を行う（無効回答は分析から除外）。

分析の結果、表3に示したとおり、「外国から見習うべきことが多い」、「南アフリカに生まれてよかった」、「南アフリカの国歌や国旗が好きだ」および「外国人は南アフリカ社会に溶け込める」に関しては、「肯定群」の割合の方が「否定群」の割合よりも統計的に有意に高いという結果が得られた。一方で、「南アフリカ人は、他国の人々よりも才能がある」および「南アフリカは一流国だ」に関しては、「否定群」の割合の方が「肯定群」の割合よりも統計的に有意に高いという結果が得られた。また、表4に示したとおり、「たくさんの外国人が南アフリカで働く」、「南アフリカ人が伝統的な文化や習慣を大切にする」および「南アフリカ人が外国の文化や習慣を取り入れる」ことに対する「肯定群」の割合が「否定群」よりも統計的に有意に高いという結果が得られた。

表3と表4に示した分析結果については、特定の「ネーション」への愛着を抱く傾向と特定

の「ネーション」への自信の低さが同時に存在する傾向が見られた点が特筆できる。また、特定の「ネーション」への愛着と異なる「ネーション」の受容性——「ネーション」の越境志向——が同時に存在しうることを示唆している点が特筆できる。

以上のような分析結果自体が、「ネーション」の越境志向と自国への愛着の同時存在の可能性を示唆しているといえるが、ここではさらに、そのような「ネーション」に関わる認識がFIFA W杯における経験とどのように関連しているのかについて分析する。なお、分析に際しては、先述のとおり、FIFA W杯における経験に関する質問項目の内、「南アフリカのチームよりも他のチームを応援した」および「異なる国籍の人々と仲良くなれた」を対象とし、それらへの回答を「そう思う」を4、「どちらかといえばそう思う」を3、「どちらかといえばそう思わない」を2、「そう思わない」を1とし、南ア社会に対する認識に関する質問項目群への回答を「そう思う」を4、「どちらかといえばそう思う」を3、「どちらかといえばそう思わない」を2、「そう思わない」を1とし、南ア社会における出来事に対する賛意に関する質問項目群への回答を「賛成」を4、「どちらかといえば賛成」を3、「どちらかといえば反対」を2、「反対」を1と



表5 2010年調査のFIFA W杯における経験と南ア社会に対する認識との関連（相関分析）

		FIFA W杯における経験					
		南アフリカのチームよりも他のチームを応援した			異なる国籍の人々と仲良くなった		
		度数	相関係数	有意確率	度数	相関係数	有意確率
南ア社会に対する認識	外国から見習うべきことが多い	861	0.043	0.205	860	0.093 **	0.006
	南アフリカ人は、他国の人々よりも才能がある	860	-0.032	0.350	859	0.019	0.569
	南アフリカに生まれてよかった	859	-0.223 **	0.000	858	-0.009	0.785
	南アフリカの国歌や国旗が好きだ	862	-0.235 **	0.000	861	0.029	0.399
	南アフリカは一流国だ	864	-0.145 **	0.000	863	0.080 *	0.019
	外国人は南アフリカ社会に溶け込める	866	-0.049	0.150	865	0.083 *	0.015

注) FIFA W杯における経験／南ア社会に対する認識：

「そう思う」=4, 「どちらかといえばそう思う」=3, 「どちらかといえばそう思わない」=2, 「そう思わない」=1

\*\* 1%水準で有意 \* 5%水準で有意

表6 2010年調査のFIFA W杯における経験と南ア社会における出来事に対する賛意との関連（相関分析）

		FIFA W杯における経験					
		南アフリカのチームよりも他のチームを応援した			異なる国籍の人々と仲良くなった		
		度数	相関係数	有意確率	度数	相関係数	有意確率
南ア社会における出来事に対する賛意	たくさんの外国人が南アフリカで働く	862	-0.031	0.358	861	0.020	0.549
	南アフリカ人が伝統的な文化や習慣を大切にしている	870	-0.134 **	0.000	869	0.128 **	0.000
	南アフリカ人が外国の文化や習慣を取り入れる	863	0.002	0.949	862	0.111 **	0.001

注) FIFA W杯における経験：

「そう思う」=4, 「どちらかといえばそう思う」=3, 「どちらかといえばそう思わない」=2, 「そう思わない」=1

南ア社会における出来事に対する賛意：

「賛成」=4, 「どちらかといえば賛成」=3, 「どちらかといえば反対」=2, 「反対」=1

\*\* 1%水準で有意

した上で、相関分析を行う（無効回答は分析から除外）。

分析の結果、表5と表6に示したとおり、南ア社会に対する認識ならびに南ア社会における出来事に対する賛意のいずれの項目に関しても、FIFA W杯における「南アフリカのチームよりも他のチームを応援した」および「異なる国籍の人々と仲良くなった」という経験との間に、統計的に有意な相関はほとんど見られなかった。本結果からは、国際的なスポーツ・イベントを通じた「ネイション」の越境経験や自身とは異なる「ネイション」との交流経験は、必ずしも特定の「ネイション」を越境する志向や特定の「ネイション」の特徴を保持する志向とは関連していない可能性が高いことが指摘できる。それと同時に、スポーツ・イベントを通じた「ネイション」を越境する経験は、必ずしも特定の「ネイション」への愛着の低さとは関連していない可能性が高いことが指摘できる。

以上の分析結果からは、本稿で対象とした南アの高等学校に通う学習者は、特定の「ネイション」の越境志向とは別の次元で、国際的なスポーツ・イベントにおいて「ネイション」の越境や異なる「ネイション」との交流を経験していた可能性が高いことが推察できる。さらに一歩踏み込んだ議論をすると、自らの志向とは関係なく、そのような経験を積む機会を提供しているのが、国際的なスポーツ・イベントであると捉えられるといえよう。

なお、FIFA W杯の経験から1年後の2011年調査時の南ア社会に対する認識や南ア社会における出来事に対する賛意について、上述した分析と同様の手順で2010年調査との比較分析を行ったところ、表7と表8に示したとおり、2010年調査と2011年調査の平均値の間には効果量(*d*)の観点から統計的に有意な差はほとんど見られなかった(*t*検定)。また、表9や表10に示したとおり、2010年調査の分析と同様

表7 2010年調査と2011年調査の南ア社会に対する認識の比較分析 (t検定)

		平均値	標準偏差	t値	効果量(d)	有意確率
外国から見習うべきことが多い	2010年調査 (N= 867)	3.37	0.842	1.476	0.07	0.140
	2011年調査 (N= 834)	3.43	0.773			
南アフリカ人は、他国の人々よりも才能がある	2010年調査 (N= 866)	2.35	1.051	0.057	0.00	0.954
	2011年調査 (N= 836)	2.35	0.987			
南アフリカに生まれてよかった	2010年調査 (N= 865)	3.66	0.741	3.170	0.15	0.002 **
	2011年調査 (N= 837)	3.53	0.863			
南アフリカの国歌や国旗が好きだ	2010年調査 (N= 868)	3.53	0.852	1.729	0.08	0.084
	2011年調査 (N= 837)	3.46	0.899			
南アフリカは一流国だ	2010年調査 (N= 870)	2.32	1.032	3.648	0.18	0.000 **
	2011年調査 (N= 833)	2.14	0.995			
外国人は南アフリカ社会に溶け込める	2010年調査 (N= 872)	3.29	0.855	2.651	0.13	0.008 **
	2011年調査 (N= 840)	3.18	0.922			

注) 南ア社会に対する認識：「そう思う」=4, 「どちらかといえばそう思う」=3, 「どちらかといえばそう思わない」=2, 「そう思わない」=1  
\*\* 1%水準で有意

表8 2010年調査と2011年調査の南ア社会における出来事に対する賛意の比較分析 (t検定)

		平均値	標準偏差	t値	効果量(d)	有意確率
たくさんの外国人が南アフリカで働く	2010年調査 (N= 867)	3.44	0.721	1.304	0.06	0.192
	2011年調査 (N= 835)	3.49	0.759			
南アフリカ人が伝統的な文化や習慣を大切にしている	2010年調査 (N= 876)	3.47	0.680	3.310	0.16	0.001 **
	2011年調査 (N= 840)	3.36	0.723			
南アフリカ人が外国の文化や習慣を取り入れる	2010年調査 (N= 869)	3.14	0.817	2.857	0.14	0.004 **
	2011年調査 (N= 837)	3.03	0.847			

注) 南ア社会における出来事に対する賛意：「賛成」=4, 「どちらかといえば賛成」=3, 「どちらかといえば反対」=2, 「反対」=1  
\*\* 1%水準で有意

表9 2011年調査のFIFA W杯における経験と南ア社会に対する認識との関連 (相関分析)

		FIFA W杯における経験					
		南アフリカのチームよりも他のチームを応援した			異なる国籍の人々と仲良くなれた		
		度数	相関係数	有意確率	度数	相関係数	有意確率
南ア社会に対する認識	外国から見習うべきことが多い	823	0.031	0.372	822	0.076 *	0.030
	南アフリカ人は、他国の人々よりも才能がある	825	-0.065	0.064	824	0.027	0.437
	南アフリカに生まれてよかった	825	-0.203 **	0.000	824	-0.034	0.326
	南アフリカの国歌や国旗が好きだ	827	-0.233 **	0.000	826	0.010	0.767
	南アフリカは一流国だ	822	-0.196 **	0.000	821	0.072 *	0.038
	外国人は南アフリカ社会に溶け込める	829	-0.204 **	0.000	828	0.075 *	0.031

注) FIFA W杯における経験/南ア社会に対する認識：  
「そう思う」=4, 「どちらかといえばそう思う」=3, 「どちらかといえばそう思わない」=2, 「そう思わない」=1  
\*\* 1%水準で有意 \* 5%水準で有意

表10 2011年調査のFIFA W杯における経験と南ア社会における出来事に対する賛意との関連 (相関分析)

		FIFA W杯における経験					
		南アフリカのチームよりも他のチームを応援した			異なる国籍の人々と仲良くなれた		
		度数	相関係数	有意確率	度数	相関係数	有意確率
南ア社会における出来事に対する賛意	たくさんの外国人が南アフリカで働く	825	-0.037	0.283	824	0.066	0.057
	南アフリカ人が伝統的な文化や習慣を大切にしている	832	-0.096 **	0.005	831	0.163 **	0.000
	南アフリカ人が外国の文化や習慣を取り入れる	829	0.044	0.208	828	0.200 **	0.000

注) FIFA W杯における経験：  
「そう思う」=4, 「どちらかといえばそう思う」=3, 「どちらかといえばそう思わない」=2, 「そう思わない」=1  
南ア社会における出来事に対する賛意：  
「賛成」=4, 「どちらかといえば賛成」=3, 「どちらかといえば反対」=2, 「反対」=1  
\*\* 1%水準で有意

の手順で、2011年調査に関しても、FIFA W杯における「ネイション」越境の経験と南ア社会に対する認識および南ア社会における出来事に対する賛意との関連を分析したところ（相関分析）、統計的に有意な差は、2010年調査の結果と同様に、ほとんど見られなかった。

表7と表8、そして表9と表10に示した結果からは、特定の「ネイション」を越境する志向や特定の「ネイション」の特徴を保持する志向、ならびに、それらと国際的なスポーツ・イベントにおける「ネイション」の越境経験や自分とは異なる「ネイション」との交流経験との関連は、FIFA W杯開催から1年の時を経ても変化する可能性があるとはいえそうにないという点が提示できる。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、南ア西ケープ州の高等学校に通う学習者に焦点をあてて、国際的なスポーツ・イベントの経験と「共生社会」意識の内、特に「ネイション」に関わる認識との関連について分析した。そこでは主に次の点を指摘した。

第1に、本稿で対象とした南アの高等学校に通う学習者については、2010年のFIFA W杯において「ネイション」に関わる認識という観点から肯定的な経験をしている割合や肯定的な認識を抱いている割合が高かったという点を指摘した（FIFA W杯の開催についても肯定的な認識を抱いている割合が高かった）。第2に、2010年のFIFA W杯開催から1年の時を経た際に、FIFA W杯開催自体への認識については変化がほとんど見られない傾向にある可能性が高い一方で、FIFA W杯開催による南アの人々の「一体感」、外国からの評価やW杯開催による経済的恩恵に対する肯定的な認識は弱まる傾向にある可能性が高いという点を指摘した。第3に、南ア社会に対する認識や南ア社会における出来事に対する賛意（中でも特に「ネイション」の越境志向）と2010年のFIFA W杯における「ネイション」の越境の経験や異なる「ネイション」との交流経験との間に関連はほとんど見られなかったという点を指摘した。また、

それと同時に、自らの社会意識に関係なく、国際的なスポーツ・イベントにおいて、「ネイション」の越境や異なる「ネイション」との交流を経験しうる可能性が示唆された。さらにそのような国際的なスポーツ・イベントにおける「ネイション」の越境志向の経験は、1年の時を経ても、社会認識との関連がほとんど見られなかったことから、時間が経つと変化する傾向にあるものとはいえそうにない点を指摘した。

以上の分析結果の内、特に第2点目は、国際的なスポーツ・イベントと「ネイション」に関わる認識との関連という観点から重要な点を示唆しているといえる。なぜなら、「和解」の契機となった側面があるという点で、1995年の南アのラグビーのワールド・カップは一定の役割を果たしたものの、それは「一時的なものであり、持続する強度を持ち得なかった」（阿部、2007、p.285）ことが指摘されてきた中、南アの人々の「一体感」という点において、2010年のFIFA W杯についても同様の傾向が見られることが読み取れるからである。このことを踏まえると、国際的なスポーツ・イベントの肯定的な側面を提示する際には、それが一過性のものであるという側面も同時に提示する必要があるということができよう。より具体的には、日本で開催される2019年のラグビーのワールド・カップや2020年の東京オリンピック・パラリンピックを通じた教育的効果について議論する際には、即時的な側面のみではなく、継続的な側面にも注意する必要があるということになる。さらに一歩踏み込んだ議論を展開すると、国際的なスポーツ・イベントにおける経験のみならず、教育を含めた経験の人々の一体感を生み出す働きかけの効果を検証する際には、長期的な視野が必要になるという点を提示することができる。

言うまでもなく、本稿は、国際的なスポーツ・イベントが人々を団結させるという肯定的な側面を持ちうる点を否定するものではない。分析結果の第3点目で示唆されたように、「ネイション」に関わる認識と2010年のFIFA W杯における「ネイション」を越境する経験や異なる「ネイション」と交流する経験とにほとんど関連が

見られなかったことから、国際的なスポーツ・イベントには、普段の個人の認識とは別の次元で「共生社会」に向けた経験を提供しうる可能性が秘められているといえる。本稿で示した分析結果を総括することで指摘できるのは、そのようなスポーツ（国際的なスポーツ・イベント）の可能性をより引き出すためには、長期的な視野で人々の意識を捉える必要があるという点である。

最後に、今後の課題を示し、本稿を締めくくる。本稿が主な分析対象とした 2010 年調査について、前述した南アの高等学校において「共生教育」を担う教科である **Life Orientation** の内、「スポーツをする」ことに関わるトピックに対する学習者の評価（役に立つか否か）と **FIFA W 杯** における「ネイション」に関わる個人的な経験（「ネイション」の越境経験と異なる「ネイション」との交流経験）との関連について分析したところ、両者の間には統計的に有意な関連はほとんど見られなかった<sup>9)</sup>。先述のとおり、**Life Orientation** ではスポーツに関わる学習内容が核のひとつとなっていることから、本教科と国際的なスポーツ・イベントを通じた経験との関連も否定することはできない。そのため、今後も本教科とスポーツ（国際的なスポーツ・イベント）との関連のより一層の分析が必要となるといえる。加えて、本稿で示した 2010 年調査と 2011 年調査間で統計的に有意な差が見られた項目は——前述のとおり厳密な追跡調査ではないため単純な比較はできない点に留意する必要があるが——、2010 年の **FIFA W 杯** の経験から 1 年という経年変化による傾向である可能性が高いと同時に、学年段階の進行による認識の変化の傾向である可能性も捨てきれないため、今後は、学年段階の違いにも着目した、より詳細な分析が求められる。

#### 〔謝辞〕

本稿で取り上げたデータの収集に協力してくださった方々、特に質問紙調査に参加してくださった学習者の方々には、この場をお借りして、改めて深くお礼申し上げます。

#### 〔注記〕

- 1) 本稿は、筆者の 2011 年度の修士論文の一部をもとに加筆・修正したものであり、本稿で取り上げる質問紙調査のデータは、筆者が修士論文執筆の際に収集したものである。なお、2011 年のデータ収集に際しては、筑波大学大学院 2011 年度大学院共通科目「国際研究プロジェクト」海外渡航費支援（課題名：「ポスト・アパルトヘイト時代の南アフリカ共和国における「多文化共生」と教育に関する研究」）を受けた。
- 2) 本計画では、「スポーツへの関わり方」には、「「する」ことだけでなく、「みる」「ささえる」ことも含まれる」（文部科学省、2017、p.3）とされている。
- 3) 2010 年の **FIFA W 杯** 中、南ア西ケープ州では、ケープ・タウンに位置するスタジアムにて、全 64 試合中、準決勝を含む 8 試合が開催された（**FIFA**, 2010）。そのことから、本稿で取り上げる西ケープ州の高等学校に通う学習者も **FIFA W 杯** を身近に感じられる機会があったことが推察できる。
- 4) 「スポーツをする」ことが好きか否かの問いについて、「好き」と「どちらかといえば好き」を「肯定群」、「どちらかといえば好きではない」と「好きではない」を「否定群」とした上で、2 項検定を行った結果、表 11 に示したとおり、2010 年調査も 2011 年調査も「肯定群」の割合が「否定群」の割合よりも統計的に有意に高いという結果が得られた。なお本稿では、2 項検定に際し、5%水準で有意な差がある項目を統計的な有意差があるものと捉えることとする。
- 5) 表 12 に示したとおり、2010 年調査と 2011 年調査の「スポーツをする」ことが好きか否かの回答の平均値の差を検定したところ（t 検定）、効果量（*d*）の観点から統計的に有意な差はほとんど見られなかった。なお、平均値の差の検定（t 検定）に際して本稿では、水本篤・竹内理（2008）で紹介されている、Microsoft Excel による計算シート（h

表 11 2010 年調査と 2011 年調査の「スポーツをする」ことが好き（2 項検定）

「スポーツをする」ことが好き		肯定群	否定群	有意確率
2010年調査	(N= 870)	81.3%	18.7%	0.000
2011年調査	(N= 845)	75.7%	24.3%	0.000

表 12 2010 年調査と 2011 年調査の「スポーツをする」ことが好きの経年変化（t 検定）

		平均値	標準偏差	t 値	効果量(d)	有意確率
「スポーツをする」 ことが好き	2010年調査 (N= 870)	3.26	0.912	2.383	0.12	0.017 *
	2011年調査 (N= 845)	3.15	0.986			

注) あなたの好みについてお聞きします：「好き」=4, 「どちらかといえば好き」=3,  
「どちらかといえば好きではない」=2, 「好きではない」=1

\* 5%水準で有意

表 13 2010 年調査の Life Orientation の「スポーツをする」というトピックに対する認識と FIFA W 杯における経験との関連（t 検定）

	Life Orientation の 「スポーツをする」という トピックは役に立つ	平均値	標準偏差	t 値	効果量(d)	有意確率
南アフリカのチームよりも他のチームを 応援した	あてはまる (N= 520)	2.68	1.227	1.408	0.10	0.160
	あてはまらない (N= 318)	2.80	1.229			
異なる国籍の人々と仲良くなれた	あてはまる (N= 520)	3.14	1.091	2.034	0.14	0.042 *
	あてはまらない (N= 317)	2.98	1.147			

注) FIFA W 杯における経験：「そう思う」=4, 「どちらかといえばそう思う」=3, 「どちらかといえばそう思わない」=2,  
「そう思わない」=1

\* 5%水準で有意

[http:// www.mizumot.com/stats/effectsize.xls](http://www.mizumot.com/stats/effectsize.xls), 2019 年 1 月 10 日取得)を用いて、効果量 (*d*) を測定・判定した。

- 6) 本稿で取り上げる、「現在の南アフリカ社会について、あなたはどのように思っていますか」（南ア社会に対する認識）および「南アフリカにおける次のようなことについて、あなたはどのように思うかについて教えてください」（南ア社会における出来事に対する賛意）に付随する質問項目群は、主にベネッセ教育総合研究所（2003）と NHK 放送文化研究所編（2004）における調査項目を参照して作成した。
- 7) 相関分析の結果について本稿では、5%水準で有意な差があり、相関係数（Pearson 相関係数）が 0.3 以上のものを統計的に有意な差がある項目として取り上げる。
- 8) 「あなたが、Life Orientation のどのトピックが役に立つと思うのかについて教えてください。あてはまる答えの全てに丸をつけてください」の問いの内、「スポーツをする」

を選んだか否かを軸として、FIFA W 杯における「ネイション」に関わる個人的な経験（「南アフリカのチームよりも他のチームを応援した」および「異なる国籍の人々と仲良くなれた」との関連について平均値の差を検定（t 検定）したところ、表 13 に示したとおり、効果量 (*d*) の観点から、いずれの項目に関しても統計的に有意な差はほとんど見られなかった。

#### 【文献】

- 阿部利洋, 2007, 『紛争後社会と向き合う——南アフリカ真実和解委員会』京都大学学術出版会。
- ベネッセ教育総合研究所, 2003, 『高校生からみた「日本」——ナショナルなものへの感覚(モノグラフ・高校生 vol.69)』, [http://benesse.jp/berd/center/open/report/monograph/kou/vol\\_69/index.html](http://benesse.jp/berd/center/open/report/monograph/kou/vol_69/index.html) (2011 年 12 月 25 日取得)。
- Department of Education [DoE] [Republic of South Africa], 2003, National Curriculum

- Statement for Grades 10-12 (General) Life Orientation, (Accessed on 12 January 2019, <http://www.education.gov.za/Portals/0/CD/SUBSTATEMENTS/Life%20Orientation.pdf?ver=2006-08-31-121627-000>).
- Fédération Internationale de Football Association [FIFA], 2010, “Match Schedule 2010 FIFA World Cup South Africa”, <https://resources.fifa.com/image/upload/2010-fifa-world-cup-south-africatm-match-schedule-644224.pdf?cloudid=atrdrqvrzqtqfeoz8pugr> (Accessed on 9 January 2019).
- Gauteng Provincial Government, 2009, “Circular 14/2009 School Calendar for 2010”, <http://www.gauteng.gov.za/government/departments/education/Specialised%20Documents/Circular%2014%20of%202009.pdf> (Accessed on 9 January 2019).
- 濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編, 1977 [2005], 『社会学小辞典 [新版増補版]』, 有斐閣.
- Hatang, Sello & Sahn Venter eds., 2011, Nelson Mandela By Himself: The Authorised Book of Quotations, MacMillan in Association with PQ Blackwell.
- 水本篤・竹内理, 2008, 「研究論文における効果量の報告のために——基礎的概念と注意点」『英語教育研究』Vol. 31, pp. 57-66.
- 文部科学省, 2017, 「スポーツ基本計画」, [http://www.mext.go.jp/prev\\_sports/comp/a\\_menu/sports/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/03/23/1383656\\_002.pdf](http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/a_menu/sports/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/03/23/1383656_002.pdf) (2019年1月9日取得).
- 中村敏雄, 1978, 「はしがき」影山健・中村敏雄・川口智久・成田十次郎編『シリーズ\*スポーツを考える5 スポーツナショナリズム』, 大修館書店, pp.1-2.
- NHK 放送文化研究所編, 2004, 『現代日本人の意識構造 [第六版]』, 日本放送出版協会.
- 坂口真康, 2013, 「対立する人々を団結へと導くスポーツの不思議な力『インビクタス/負けざる者たち』(2009年)」, 荒川麻里代表, 『映画で学ぶ《教育学》』Vol. 3, 教師教育視聴覚教材研究会, pp.22-23.
- 坂口真康, 2015, 「南アフリカ共和国における「共生」のための教育に関する一考察——西ケープ州の高等学校を舞台とした認識のせめぎ合いに着目して」『比較教育学研究』Vol. 50, pp.89-111.
- 佐久間勲・日吉昭彦, 2012, 「ワールドカップサッカー・南アフリカ大会と国民イメージ(1)——国民イメージの変化」『情報研究』第47号, pp.1-11.
- 清水輪, 2012, 「スポーツとナショナリズム」井上俊・菊幸一編著『やわらかアカデミズム(わかる) シリーズ よくわかるスポーツ文化論』, ミネルヴァ書房, pp.40-41.
- Smith, David, 2010, “Nelson Mandela gives World Cup a dream finale with a wave and a smile – Former president caps nation-building tournament spirit with appearance at Johannesburg’s Soccer City Stadium” (11 July 2010), The Guardian, <http://www.guardian.co.uk/football/2010/jul/11/world-cup-final-nelson-mandela> (Accessed on 6 March 2019).
- 田村栄一郎, 1986, 「ナショナリズム (英) nationalism」日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』, 東洋館出版社, pp. 692-693.
- Zuma, Jacob, 2009, “2010 New Year’s Message to the Nation by President JG Zuma” (31 December 2009), The Presidency Republic of South Africa, <http://www.thepresidency.gov.za/speeches/2010-new-year%27s-message-nation-president-jg-zuma> (Accessed on 6 March 2019).

**A Study of Experiences during International Sports Events and Consciousness  
regarding “Living Together Society”: Focusing on High School Learners  
in the Western Cape Province in the Republic of South Africa**

Masayasu SAKAGUCHI

The purpose of this study is to consider experiences during international sports events and consciousness regarding “living together society” (especially perceptions regarding “nations”). In order to do so, this study analyses the questionnaire data collected in 2010 and 2011 at high schools in the Western Cape Province in the Republic of South Africa. Specifically, this study analyses the 2010 questionnaires answered by learners from grade 10 and 11, and the 2011 questionnaires answered by learners from grade 11 and 12.

The main results of the analysis are as follows. First of all, this study points out that majority of the learners participated in the questionnaires had positive perceptions towards the 2010 World Cup organized by the Fédération Internationale de Football Association (FIFA) and experienced positive events regarding “nations”. Secondly, this study suggests that the positive perceptions which the learners had such as the “sense of unity” right after the 2010 FIFA World Cup possibly seemed to be faded out after a year. Thirdly, this study mentions that through the analysis, there seemed to be little relationships between the perceptions regarding “nations” and the experiences during the international sports events such as the World Cup.

In conclusion, this study discusses that there is a possibility that people can experience crossing borders of “nations” during the international sports events no matter how they perceive “nations”. In addition, this study states that although the role of sports in changing people’s perceptions towards “nations” may be significant, it is important to understand that the influence of sports is limited in terms of period, therefore it is crucial to discuss the effects of sports in a long-term perspective.